

# DO FIELD

Doshisha  
University

同志社大学スポーツ健康科学部教員父母連絡会報 [ドウ・フィールド]

# DOFI FIELD 21



2023.11 **21**

RESEARCH  
SPO-KEN  
SEMINAR

リサーチ! スポ健ゼミ  
総合的な  
視点を鍛える

本学部で扱うスポーツ健康科学とは、多様な角度からスポーツおよび健康を科学する文理融合型の応用総合科学です。今回はそれらの中から運動処方とスポーツビジネスのゼミを紹介し、幅広い領域を学びながら学際的な視点を育てる学生たちの様子をお伝えします。



運動処方ゼミ  
石井 好二郎 教授

特徴

健康目的から競技力の向上まで幅広く運動処方を考える

本ゼミでは、子どもから高齢者、病気の人が競技者までの運動処方の開発・展開を扱っています。運動処方と

は個人の目的・性別・年齢などに応じて、運動のやり方を具体的に規定したもの。肥満など生活習慣病の予防・改善や介護予防などを含めた、健康維持・体力向上、あるいはアスリートの競技力向上などを目的としています。

石井教授の最近の研究は、小児・高齢者・女性に対して、さまざまな環境が与える影響を中心としています。環境とは自然や地理的なものから、いわゆる健康格差などの社会的環境までを含みます。例えばコンビニの多い地域に住む子どもは肥満になりやすい、公共交通機関の発達した地域では車をあまり使わないので肥満になりにくいなど、人の健康はさまざまな環境と密接に関係しています。これらの関係を、データを基に解き明かし、健康づくりへの道筋を開こうというものです。

学生たちは関心のあるテーマを選び、3年生はグループごとに研究を進めて発表します。自身の競技力向上を研究するアスリート学生も少なくなく、8月にハンガリー・ブダペストで開催された世界陸上に出場した、田中希実さん(2022年卒)と後藤夢さん(2022年卒)も本ゼミの卒業生。現在、博士後期課程1年の花野宏美さんも、2021年、武術太極拳国際大会で4位となり、同社社総長賞を受賞しています。

石井教授は本学就任以前に、広島大学、北海道大学でも多くの学生を指導してきました。そのため大学の垣根を

越えた石井ゼミのネットワークが全国にあり、OB・OG訪問への橋渡しが行われています。研究活動も盛んです。研究活動も盛んで、前任校から現在まで数多くの博士・大学教員を輩出。本学部の卒業生・修了生からも5名の大学教員が誕生しています。現在も大学院生を積極的に国内外の学会で発表させており、2023年3月には日本発育発達学会において、石井研究室の院生が大会優秀研究賞を2年連続で受賞しました。まさしく文武両道のゼミと言えるでしょう。

そのような先輩を見た学生たちは、最初は不安に感じることも多いそうです。「でも、私も最初は何もできない一学生でした」と石井教授。学部生も学会に伴って見学させたりゼミ合宿を開いたり、懇親会を開いたり、メリハリをつけながら学生の成長を温かく見守っています。



内容

聴き手の関心を惹きつけるプレゼンテーション力を磨く

3年生のゼミでは、3人1組で1つのテーマを調べ、順番に発表を行います。石井教授も事前に概要を読み、資



ご挨拶 教員父母連絡会会長 金子 功

教員父母連絡会会員の皆様におかれましては、平素より会の運営におきまして、ご理解とご協力をいただき、心より御礼申し上げます。

今年も数多くの国際スポーツイベントが開催され、アスリートの熱い戦いを観戦して改めてスポーツの素晴らしさを実感しております。現代社会では、人生の価値観や生活の変容により、かつてないほど「スポーツ」と「健康」に対する関心が高まっています。そのような時代に同志社大学スポーツ健康科学部で幅広い知識や経験を学んだ学生たちが社会に出てどんな活躍してくれるのか、父母としても大変楽しみであります。新型コロナウイルス感染症も5類感染症と位置付け

られ、学生たちも本来の大学生らしい生活を送れるようになりまして、勉学にまた課外活動に思いきり若いパワーを発揮できるよう、教員父母連絡会も出来る限り、学生への支援をしていきたいと存じます。また学生たちの学びに多大なるご尽力を頂いております教員の方々をはじめ、同志社大学スポーツ健康科学部の発展に父母の立場として微力でもご協力が出来ればと思っております。

最後になりますが、学生のため大学のために、より良い教員父母連絡会の運営が出来ますよう、会員の皆様のご意見、ご協力を賜りますよう、今後とも宜しくお願い申し上げます。

C O N T E N T S

ご挨拶 金子功会長

01 特集 リサーチ! スポ健ゼミ 総合的な視点を鍛える  
石井ゼミ・庄子ゼミ

06 ATHLETE スポ健アスリート列伝  
032 真野凜風さん/033 波多野崇史さん

08 FOCUS スポ健きらり  
015 和田凜さん・眞嶋花さん・高浜優衣さん

10 TOPICS 2023教員父母連絡会 総会レポート

12 LETTER 母から子へ、子から母へ  
椿原直実さん・椿原響さん

13 ACADEMIC 成績通知書の確認方法

14 TOPICS  
新しく着任された先生から自己紹介 岩田先生・高橋先生/スポーツ健康科学部生の活躍

17 ANNOUNCEMENT  
緊急対応奨学金の採用状況について/寄贈図書/キャンパスカレンダー

『DO-FIELD[ドウ・フィールド]—同志社大学スポーツ健康科学部教員父母連絡会報—』

「DO」は、行う、行動を起こすこと、能動的、積極的な姿勢を示し、DOSHISHAの「DO」も意識しています。そして「FIELD」は文字通り、フィールド、場の意、スポーツのイメージも喚起させます。DOSHISHAおよびスポーツ健康科学部というフィールドで、何ができるか、教員、父母、もちろん学生も一緒になって考えるための相互のコミュニケーションの場でありたいという願いを込めました。(ネーミング/辻田和樹・父母会員OB)





で、この環境を活かして積極的にコミュニケーションスキルを身につけたいです。私は食育ことや栄養関連の勉強が好きなので、将来は食品関係の企業に就職できればと考えています。教職課程を履修していますが教員になる予定は今はなく、学んだことを将来、学校・保護者・子どもとの関わりに役立てたいと思っています。

**松井** ゼミのプレゼンや学会を見学する機会を活かして、やはりコミュニケーション力を磨きたいです。

**前田** 大学での交友関係は広く浅くになりがちだと思いますが、ゼミは仲間と学びを共有できる場所。同じ方向を向き、情報交換をしながら切磋琢磨し合って成長したいです。

スポーツ科学・健康科学関連のゼミが大半を占める本学部において、本ゼミではスポーツビジネスを扱っています。スポーツについて、する・観る・支える人たちを増やし、ひいては日本全体に置いて、有形無形のスポーツ環境の充実を目指すのが庄子准教授のビジョン。従来は体育行政という形で国が多くを担っていたスポーツ振興策ですが、現在は民間の創意工夫も大いに求められる時代です。そこで日本経済研究所、日本政策投資銀行、その他シンクタンクとの共同研究を進めながら、日本のスポーツ市場規模の計測を行うのが、庄子准教授の現在の主な研究テーマです。



**スポーツビジネスゼミ**  
庄子 博人 准教授

**データ分析によって  
スポーツ振興に寄与する学問**

学生も同じビジョンのもと、スポーツ施設、スポーツ教育など、スポーツビジネスに関するあらゆる分野での研究が可能です。特に論文を読むだけでなく、フィールドワークや民間企業などの共同研究を行うことにより、スポーツ産業界の課題解決や提案につながる、実践的な学びが特徴です。また、庄子准教授はゼミ生をファーストネームで呼んでおり、教員と学生との距離が近いのも特徴の一つです。

庄子准教授がゼミ生に願うのは、スポーツを客観的に学んだ上で、スポーツ界で活躍する人材に育ってほしいということ。「スポーツが好き、スポーツをやりたいという気持ちだけでスポーツ界に入ると、スポーツが好きではない人にスポーツのよさを伝えられなかったり、専門知識の不足によってファイナンスに疎くなったりと、さまざまな問題が生じがちです。だからこそエビデンスやデータに基づいた活動が、今後のスポーツ人口の拡大につながるのだと考えています」

**内容**  
グループ研究と質疑応答で  
仲間と高め合う授業

3年生の授業は1分間スピーチからスタートし、全員が近況報告をしながらウォーミングアップを行います。毎回のスピーチを聴き合うことにより、メンバー間の親睦を深める目的もあります。その後、3、4名のグループによる発表を行い、通常は残りの時間を各班的作業に充てています。取材日は春学期最後の授業だったため、15回分の研究成果を各班が発表しました。

最初の班が手がけるのは「スポーツ用品メーカーとの連携プロジェクト。スポーツにおける社会問題を解決した上で、協力メーカーの収益を上げる提案を行うことが目的です。テーマは「女子スポーツとジェンダーバイアス」。高校の部活を終えると競技から離れる女性が多いなど、男性に比べて女性のスポーツ人口が少ない点に着目。女性であるメンバー自身の経験も活かしながら原因を調べ、スポーツ環境の改善案につなげようとしています。

研究方法としては、女性がスポーツをする上での阻害要因と促進要因について、先行研究をもとに調査し、2つの要因を考察して政策を考えます。納得できるデータが得られなければ、中・高校生を対象にアンケート調査の実施を予定しています。発表後は、庄子准教授やゼミメンバー、オプザーバーとして参加していた大学院生との質疑応答に移ります。スポーツ環境の定義に関する質問や、女性がスポーツから離れる根源的な原因をさらに掘り下げた方がよいというアドバイスなどを、学生たちは真剣な表情で受け止めています。

2つめの班のテーマは「Jリーグの観客動員数を増やすための提案」でした。Jリーグの試合について社会人の



松村 梨那さん

**松村** 玄米や全粒粉のパンなど健康食への関心を通じて、高校時代から健康全般に非常に興味がありました。石井ゼミでは健康について幅広い分野を研究できると知り、自分の興味をもっと追究できるかなと思ったのが動機です。スポ健に入ったのは、家族でスポーツを楽しむ機会が多く、スポーツと健康分野の両方を学びたいと考えたからです。

**古谷野** 私はもともと栄養関係に興味



前田 諒飛さん

僕が子供どものときからずっと水泳を続けていました。大学の授業で生涯スポーツとして水泳がとても効果的であることを学び、水泳の新たな可能性を知って、運動処方に興味を持ちました。

企業に就職した卒業生からも「プレゼンテーション力が鍛えられた」という声がよく聞こえてくるように、豊かな実を結んでいるのです。

**ゼミ生座談会**

**【出席者】**

松村 梨那さん(4年)、  
前田 諒飛さん・古谷野 利紗さん・  
松井 仁成さん(3年)

——石井ゼミを志望した動機を教えてください。

があったので、ゼミを決めるときは他の栄養学ゼミとの間で迷いました。でも、まだ明確なテーマを持っていないだったので、石井ゼミで健康について幅広く学びながら、栄養学の分野ともリンクさせて学際的に学べばと考えました。また石井ゼミでは大学院生や卒業生とのつながりがとても強いところにも魅力を感じました。

**松井** 僕は高校時代、野球をしていて、運動のパフォーマンスについて独学で調べていました。野球は大学の途中で辞めて社会人になる準備を考えたとき、運動パフォーマンスだけでなく、もつと運動・健康を多角的に学ぶ必要があると考えました。各ゼミの内容を調べると、石井ゼミが最も幅広い分野を扱っていると思い、ここを志望しました。

——石井ゼミの魅力教えてください。

**松村** 一人ひとりの研究テーマが異なる面白さがあるし、皆がフレンドリーで居心地がいいです。

**古谷野** いろいろな人の視点で幅広い内容を吸収できる面白さがあります。石井先生はとても明るく、全員にくまなく気を配ってくださるので楽しく過ごせています。

**松井** プレゼンする機会が多いので、皆が日々レベルアップしていくのを感じて励みになります。

**前田** ゼミで得た健康分野の知識を、自分の実生活の目標設定などに応用できたとき、学ぶ楽しさを実感します。また石井先生はよく、学会スタッフのアルバイトなどをゼミ生に呼びかけてくださいます。そういう場所では他大学の方や社会人の方とも交流できて、よい社会経験になっています。

——ゼミでの学びを通じて、どのように成長していきたいですか。

**松村** プレゼンはPresentと同じと先生がおっしゃるように、相手にとって理解しやすく、プレゼンになるようなプレゼンテーションができるようになって、就職活動でも社会に出てからでも、多様な機会でもその力を活かさればと思っています。

**古谷野** コロナ禍で人と話す機会が減ってしまいましたが、ゼミに入ってから仲間や先輩、社会人の方と話す機会が増えました。プレゼンではスライド作成は好きでも話す方は苦手なの



観客席から→新球場へのヒアリング調査(エスコンフィールドHOKKAIDO)①

今回、庄子ゼミ・二宮ゼミ・遠藤ゼミのスポーツマネジメント系研究室で合同フィールドワークを行いました。

report 庄子ゼミ・二宮ゼミ・遠藤ゼミ 合同フィールドワーク

スポーツ健康科学研究科 安井 賢佑さん

庄子先生は、授業は真剣モードで、それ以外はとてもフランクに接してくださる方。先生は授業冒頭の1分間スピーチに対しても、データに基づいて事前準備をしっかりされます。僕もデータの活用法をしっかりと学び、マネジメント力を身につけて、社会に出たいと思っています。

目的は今年3月に開業した北海道日本ハムファイターズの本拠地であるエスコンフィールドHOKKAIDOの視察とファイターズの職員さんへのヒアリング調査です。1日目は球場を訪問し、試合観戦をして、野球の本場メジャーリーグの球場を参考にしたデザインやファイターズが観客を楽しませるための創意工夫を体感しながら学びました。2日目は球団職員の藤野氏からファイターズの経営ビジョンや具体的な施策をお話していただきました。今回はその中で学んだことを報告します。ファイターズは球場を中心とした一帯を「Fビレッジ」と名付け、行政と協力して街作りを行っています。ファイターズの本拠地移転により、球場の周りにはマンションや高齢者専用の居住



子供の遊び場→新球場へのヒアリング調査(エスコンフィールドHOKKAIDO)②

施設などが建設されました。そのため、北海道北広島市は2022年、北広島市内在住地・商業地とも上昇率全国1位を記録しました。このように、球団の働きかけが地域の活性化を推進する結果を生み出しました。また、これまでファイターズは札幌ドームが本拠地でしたが、球場内の広告が札幌ドームに帰属していたことで、広告収入を十分に得られていませんでした。しかし、エスコンフィールドを球団で所有することで広告収入も全額入るようになり、広告収入が大幅に向上しました。さらに、自前の球場となったことで他の団体との兼ね合いを気にすることなく運営ができるようになったことで撤収作業が減り、効率的な運営ができるようになりました。一方で、球場に多くの人が訪れたことでアクセスや交通の混雑についてマインスマな意見が出ました。これらのトラブルに対し、ファイターズは試合前後の滞在時間を伸ばすために様々な施策を講じました。具体的には、球場周辺に設けた子どもが遊べる施設の利用を促しました。さらに、人気チェーン店から北海道のご当地グルメを取り揃

えた飲食施設は試合後、2時間ほど営業しており、試合後も賑わっています。また、試合前後にアーティストによる生演奏やパフォーマンスなどのイベントを開催しています。このような対策により、混雑の緩和に成功しました。以上のように、今回のフィールドワークでは最新のスポーツビジネス運営を学ぶことができました。



若者のキャンプ人口が少ない背景を探り、キャンプに対する阻害要因、促進要因を考察して、若者のキャンプ実施率を上げるための施策を協力メーカーに提案するのが目的です。庄司准教授からは多角的な観点から考えられているという評価と同時に、統計解析が可能なデータの集め方について助言がありました。こうして学生たちは教員の指導のもとで日々高め合い、データ・リテラシーについても学びながら、スポーツビジネスに関する学問的態度を少しずつ身につけていきます。

ゼミ生インタビュー

松野 佳穂子さん(3年)

複眼的思考と 確かな分析力を 身につけたい

同志社女子大学のバスケットボール部でプレーしています。千葉県出身で、子どもの頃からBリーグの千葉ジェッツの試合をよく観戦する中で、スポーツクラブの運営に興味を持ちました。本学部を選んだのは、スポーツを科学、健康、社会学など多角的に学べて、海外とのつながりも持てることなどを総合的に考えた結果です。基礎実習で庄子先生の授業を受け、Jリーグ



松野 佳穂子さん

におけるビジネスを自分なりに考察した経験がとても面白かったので、このゼミを志望しました。ゼミでの活動はまだ始まったばかりですが、研究とは「なぜ」の深掘りをするということと理解して、日々研鑽しています。答えがすぐに見つからなかったり、ある程度確信を持って発表しても先生から鋭い指摘をいただいたりする厳しさがあります。だからこそ自分たちで突き詰める中で何かを見つけたときは手ごたえを感じるし、とても楽しいです。今手がけているのは、競技用ボールなどのスポーツ用品メーカーさんと協力した、ジェンダーの観点からのスポーツ課題解決です。卒論はBリーグのクラブ経営の課題について研究する予定です。社会は今後、さらに変化が進むと思います。その中でしっかりと自分の信念を持って変化に対応しながら、正しい選択をして生きていける人間になりたいです。そのためにもスポ健やこのゼミで、さまざまな事象を多角的に見て分析する力を養うことが、とても大切だと考えています。

増田 樹さん(3年)

スタジアム・マネジメントを学び 将来はエンタメ業界で人を笑顔に



増田 樹さん

15年間、フルコンタクト空手を続けていますが、子どもの頃からスポーツ観戦が好きでした。特に野球観戦が大好きで、甲子園球場や京セラドームなどに頻繁に行っていたので、スタジアム・マネジメントといわれる分野に興味を持ち、このゼミを志望しました。今は3人グループで、Jリーグの観客動員数増加のための施策を研究しています。Jリーグの観客は平均年齢が上がってきているので、もっと若者に来場してもらい、かつ全体としての動員数も増やすにはどうすればいいかを、仮説を立てて検証している段階です。卒論は好きな野球をテーマに研究したいと思っています。デイズニリゾートへよく行くのですが、人に笑顔や幸せを届けるエンタメの仕事に興味があります。卒業後はエンターテイメントの分野に行つて、人を笑顔にした

### 軟式から転向した大型投手

#### 軟式野球から硬式に転向し 152キロを投げる異色の投手

**小** 1で、地元の飛鳥紀寺スポーツ少年団で軟式野球を始める。中学には硬式野球部がなかったこともあり、地元の友だちと一緒に好きな野球を楽しむうち、自然と中・高校でも軟式野球を続けることに。高校2年時に全国ベスト4、国体3位。本学には公募推薦入試を受けて入学した。

受験前は準硬式野球部への入部を考えていたが、高校の監督が背中を押してくれた。「君はポテンシャルが高いから硬式に転向しなさい」と、日々、職員室で説得されたそうだ。自身は硬式

野球部のレベルの高さ及び腰だったが、入学前にトライアウトを受けて入部が認められた。

監督の予想に違わず入学後も身長は伸び続けて、現在188センチ。体重も高校時代より約10キロ増えた。50m走は6秒2。瞬発力もある。ただ高校では野手がメインでエースピッチャーではなかったため、大学では硬式のピッチングにアジャストすべく、基礎から鍛え直した。高校で135キロあったストレートの球速は、現在152キロ。さらに160キロ近くを目指す。

軟式と硬式とは用具が異なるため、身体の使い方も当然違う。転向によって最も苦労したのは変化球だった。「軟式の球は柔らかいので握り潰せば投げられたのですが、硬式の球は握り潰せないし、思い切り投けても重さで抜けてしまう。2年生の秋頃までは本当に苦労しました。1学年上のハイレベルな先輩投手の3人に必死でついていったおかげで、今



【まの・りんか】 スポーツ健康科学部4年次生。天理高等学校出身。小学校1年から高校卒業まで軟式野球部所属。高校時代は中堅手兼投手として、2年時に全国高等学校軟式野球選手権大会ベスト4、国体3位。大学進学後、硬式野球に転向。投手として2年時からベンチ入りを果たし、4年春からエース。3年時に侍ジャパン大学代表候補。

野球はチームスポーツであると同時に個人スポーツでもある。特に投手は孤独なポジションだ。「守備をする仲間がいても、捕手の要求するコースに投げきれなくて打たれば、それは投手一人の責任。そしてピンチに立たされても、自分を変えられるのは自分しかない」といふ厳しさがあると思いません。

孤独にもっと慣れようと、例えば日本中の、どの大学生よりたくさん走り込みをしようと決めた。一人で走るという孤独な練習をやり抜いた先に、プロにしろ実業団にしろ、一つ上の世界へ進む道が拓けると信じている。

遠方の有名トレーナーのもとで学び、肉体大改造にも着手した。「僕は身長があるので、今までは長いリーチに頼

#### 孤獨に慣れる練習と ウェイトトレーニングで 新たな世界を待ち望む

**公** 式戦デビューは2年の春。3年時には大学日本代表候補補合宿にも参加。今年の関西学生春季リーグで初めてエースとしてマウンドに立ち、完投した。次第に自信がついて後輩に指導する機会も増え、先輩としての自覚も育ってきた。その過程でプロへの関心が芽生えたのは自然なことだろう。3年の秋、ドラフト会議が終わった頃に覚悟を決めた。「孤独」と向き合う覚悟だ。

「投手に必要な素質は？と尋ねてみた。『投手がブレるとチーム全体がブレる。だから投手に必要なのは『自己中』さだ』と思います。わがままという意味ではなく、何があっても自分を強く信じる強靱なメンタルという意味。そして捕手を信頼し、勇気をもって投げる。自分と周囲を信じる力が必要ではないでしょうか」

子どもの頃から大の負けず嫌い。野球の一番の楽しさは「自分が投げて勝つところ」と笑う。高校時代の監督がよく口にしていた「その他大勢になる」という言葉を好み、後輩の指導に心を砕きながらも自身の練習に注力し、新たな世界に備えている。

目標とするのはフォームが似ているダルビッシュ投手。WBCにも出てみたいと顔を輝かせる。本誌が発行される頃ドラフト会議は終わっているが、進路に関わらず、大型投手の成長を今後も見守りたいものだ。

### 真野凜風さん(4年) Rinka Mano 硬式野球

### 同志社から日本の守護神へ



【はだの・そうし】 スポーツ健康科学部2年次生。広島県立吉田高等学校出身。サンフレッチェ広島ジュニアユース時代(中学3年時)、日本クラブユースサッカー選手権U15優勝。同ユース時代(高校3年時)、プレミアリーグWEST優勝。2021年、U18日本代表候補。2022年6月、U19日本代表としてモリスレベロ・トーナメント出場。

#### 中高で日本一を経験後 セカンドキャリアを考えて本学へ

**父**、兄は国体や「春高」で活躍したパレーボール選手。自身は既定路線を行くより他のスポーツで家族以上の活躍をしたいと、小1でサッカーを始めた。初めて1か月ほど経った時、「走るの苦手だから」と、ゴールキーパー(以下GK)に。元日本代表の川島永嗣選手に憧れ、小4からGK専門スクールに入り腕を磨いた。小6でプロ入りを目標に定めた。

中学からサンフレッチェ広島のジュニアユースに所属して日本一を経験。高校時代は広島ユース専用寮に入り、競争率400倍とされるユースセレク

ションを勝ち抜いた仲間と切磋琢磨した。Jリーグ随一ともいわれる整った環境で育成年代を過ごし、プレミアリーグWESTでも優勝を経験した。ただ卒業時のプロ昇格は叶わなかった。プロで活躍する自信も、まだ育っていない

かった。プロになれなかったユース選手は指導者になるケースが多いが、その未来は考えなかったという。「自分が届かなかった場所に届きそうな選手たちを見ているのは悔しいから」と、プロが無理ならサッカーからは離れたと考えていた。「それなら将来のために人生の幅が広がるような大学で学ぼうと考え、同志社でプロを目指しながら勉強も頑張ろうと思いました」

ちょうどその頃積み上げてきたものが少しづつ評価され始め、U18日本代表候補に選出。関東の強豪大学からも誘いを受けながら、最初に誘ってくれた同志社に進学した。スポーツに理解の深い本学部を選択し、現在はスポーツマーケティングに関心をもちなが

#### 大きな挫折を克服し プロへの挑戦を続ける

**昨** 年6月にはU19日本代表に召集され、毎年フランスで開催されるU23の国際大会モリスレベロ・トーナメントに出場。帰国後も広島のプロ練習に参加するなどして、自身でも納得できる充実の時間を過ごせた。周囲からの期待も高まっていた。

しかし3カ月後に後十字靭帯を損傷。苦難の半年を過ごす。きっかけはフランスで戦った、当時弱冠17歳のアルゼンチン代表FW、アレハンドロ・ガルナチョ。「衝撃を受けました。彼は同世代なのに、既にマンチェスター・ユナイテッドで何億円という年俸を稼ぐ絶対的ストライカー。世界にはとてつもない選手がいることを目の当たりにして圧倒されてしまったんです」

広島での練習でもプロのGKの技術の高さに自信を失いかけた。焦りと不安に押しつぶされて自分を追い込みすぎた結果、下半身に必要以上の負荷がかかった。そしてある朝起きると、膝が曲がらなくなっていた。

休養中は自身を見つめ直す時間になったという。「ガルナチョのレベルに自分は到達できない」と、自分で限界を作っていたことに気づいたのだ。そうじゃない、限界など作らず挑戦し続ける自分でいたいと、価値観をシフトできた。フランス遠征の仲間の大半はプロ

で活躍している。彼らのいる世界に、もう一度戻りたいと思った。「僕は考えすぎて負のスパイラルに陥ってしまいうタイプ。だからけがをしてからは、いろいろな人とコミュニケーションをとる中で、問題を自分の中できちんと消化していきけるようになりました。卒業時の目標設定も再確認する時間になりました」

今シーズンからは気持ち切り替え、「辛い時期に支えてくれた人々への恩返しにもなれば」と、ゴールを守る。すべてに恵まれていた広島時代と比べると、同志社サッカーの環境は十分とはいえない。それもかえって感謝の気持ちで育ててくれた。

GKは人間性や私生活での人間関係が表れやすいポジションだと、よくいわれる。「大事な場面で守備の要として自分の意見を聞いてもらえるよう、普段から信頼されてこそポジションなんです」と自らに言い聞かせる。守護神の名にふさわしい人間性を、挫折という経験が育ててくれたようだ。

プロ入りという最大の目標は今も変わらない。目標の一つだったU20ワールドカップの代表には残念ながら最終的に選から漏れたが、代表候補GKキャンプでは技術面の課題を再確認できた。今まで自分の身体能力や勢いに頼ってプレーしていたことに気づけたのだという。「基礎を大切にして、キヤッチやキックの精度をさらに上げられるよう頑張ります」

### 波多野崇史さん(2年) Souchi Hadano サッカー

ションを勝ち抜いた仲間と切磋琢磨した。Jリーグ随一ともいわれる整った環境で育成年代を過ごし、プレミアリーグWESTでも優勝を経験した。ただ卒業時のプロ昇格は叶わなかった。プロで活躍する自信も、まだ育っていない

かった。プロになれなかったユース選手は指導者になるケースが多いが、その未来は考えなかったという。「自分が届かなかった場所に届きそうな選手たちを見ているのは悔しいから」と、プロが無理ならサッカーからは離れたと考えていた。「それなら将来のために人生の幅が広がるような大学で学ぼうと考え、同志社でプロを目指しながら勉強も頑張ろうと思いました」

ちょうどその頃積み上げてきたものが少しづつ評価され始め、U18日本代表候補に選出。関東の強豪大学からも誘いを受けながら、最初に誘ってくれた同志社に進学した。スポーツに理解の深い本学部を選択し、現在はスポーツマーケティングに関心をもちなが